

# 特集

## 【歩行障害・認知症をともなう LUTS の治療とケア】 認知症をともなう OAB の 薬物治療

後藤百万

名古屋大学大学院医学系研究科泌尿器科学

**Key Words** 過活動膀胱, 認知症, 薬物治療, 抗コリン薬,  $\beta_3$  作動薬

わが国における過活動膀胱（overactive bladder；OAB）治療薬は、80歳代をピークとして約70%が70～90歳の高齢者に処方されている。高齢者では加齢とともに認知機能障害の頻度が増加し、認知症をともなうOAB患者の薬物治療においては薬剤選択に注意が必要である。抗コリン薬は、口内乾燥や便秘など高齢者で問題となる副作用の発現頻度が高く、認知機能に影響を及ぼす可能性も危惧されている。高齢者の多くはポリファーマシーの状態であることが多く、抗コリン作用を有する薬剤を多用している場合には、OAB治療薬としての抗コリン薬の投与の際に副作用の発現に注意が必要であり、特に認知症の患者では $\beta_3$ 作動薬の選択が推奨される。

### はじめに

過活動膀胱（overactive bladder；OAB）の罹患率は2012年の時点で1,040万例と推計され、罹患率は加齢とともに増加し<sup>1)</sup>、超高齢社会を迎えたわが国では、薬物治療を受ける患者の年齢も高齢化している。2014年の調剤薬局処方箋データによれば、OAB治療薬は80歳代をピークとして約70%が70～90歳の高齢者に処方されている<sup>2)</sup>。

高齢者では、今回の特集で解説されているような歩行障害を引き起こす疾患の罹患率が高く、また認知機能低下も加齢とともに頻度が増加する。本項目のテーマは「歩行障害・認知症をともなうLUTSの治療とケア」であるが、OABの薬物治療に関しては歩行障害との直接的な関係は少なく、むしろケアにおいて配慮すべき点が多いことから、本稿ではOAB薬物治療と課題、また認知機能障害を有するOAB患者における薬物治療の留意点について述べる。

Momokazu Gotoh（教授）